

## 特集「運用でカバーする時代の終焉へ向けてのインターネットと運用技術」の編集にあたって

石橋 勇人<sup>1,a)</sup>

インターネットや組織内の情報ネットワーク、および、それらに接続され様々なサービスを提供する情報システムが、社会的基盤の一部として認知されるようになって久しい。これらの情報通信基盤は一般に24時間常時稼働し、非常に多数の利用者を抱えているため、予測を越えたアクセスの集中による性能の劣化や障害の発生を被ったり、稼働開始後の状況の変化に対応するために絶え間なくシステムの更新が要求されたりするなど、円滑な運用・管理を行うことは決して容易ではない。

そのような状況下において発生する様々な問題に迅速に対処するため、現状では、現場のオペレータが経験知をもって対応するということが行われがちである。これがいわゆる「運用でカバー」であり、現在の情報通信基盤を陰で支えているのは一面の真実である。しかしながら、このような経験知は個人に蓄積されることが多く、属人化するために特定個人への負担が増大したり、異動によって知識が失われたりするなど、有効活用が難しい、という問題がある。したがって、経験知を汎用的な形式知へと変換し、共有することが重要であり、さらには自動化へと結び付けることが、大規模化、複雑化する一方である情報通信基盤の管理・運用にとって必須の課題である。

本特集号は、こういった観点から、現代社会にとって不可欠な情報通信基盤の運用・管理に関する最新の研究、開発、実験、運用等に関する論文を集めて掲載することにより、運用でカバーする状況からの脱却に寄与することを目指し、インターネットと運用技術(IOT: Internet and Operation Technology)研究会が中心となって企画・編集を行った。IOT研究会が企画する特集号では、毎年開催しているインターネットと運用技術シンポジウム(IOTS)との連携を重視しており、本特集号もまたIOTS2016と連動したテーマを掲げるとともに、IOTSのプログラム委員を編集委員に迎えて連携の強化を図っている。

本特集号には16編の論文が投稿され、14名の委員からなる特集号編集委員会が中心となって査読を行った。慎重かつ丁寧な査読の結果、システム運用・管理やセキュリ

ティに関する5編の論文を採録している。結果的に採録された論文はすべて日本語によるものであったが、投稿論文のうち4編は英語で執筆されたものであり、海外からの投稿もあるなど、特集が広く興味を持っていただけたことは企画に携わったものとして喜ばしい。

最後に、本特集号を企画する機会を与えていただき、実施にあたってご尽力、ご支援をいただいた学会関係者各位に感謝するとともに、日頃より情報通信基盤を支える技術に関連する研究、開発を行い、優れた論文を投稿していただいた著者の方々、多数の研究成果を綿密に精査し、より良い論文にすべく有益なコメントをご提供いただいた査読委員および編集委員の方々に深謝する。また、編集作業にあたって常に適切なサポートをいただいた副編集長ならびに学会事務局の皆様にも感謝の意を表したい。

本特集号が読者の皆様への有益な情報となり、今後の情報通信基盤の一層の発展の一助となれば幸いである。

「運用でカバーする時代の終焉へ向けてのインターネットと運用技術」特集号編集委員会

- 編集長  
石橋勇人 (大阪市立大学)
- 副編集長  
北口善明 (東京工業大学)
- 編集委員 (五十音順)  
安東孝二 (mokha)  
石島 悌 (大阪産業技術研究所)  
柏崎礼生 (大阪大学)  
坂下 秀 (アクタスソフトウェア)  
佐藤 聡 (筑波大学)  
島岡政基 (セコム)  
土井裕介 (Preferred Networks)  
中村素典 (国立情報学研究所)  
林 治尚 (兵庫県立大学)  
宮下健輔 (京都女子大学)  
山井成良 (東京農工大学)  
吉田和幸 (大分大学)

<sup>1</sup> 大阪市立大学  
Osaka City University, Osaka 558-8585, Japan

<sup>a)</sup> ishibashi@media.osaka-cu.ac.jp